

明朝が設置した福建省における城郭の特徴とその成立背景 — 14世紀後半・洪武期の築城ラッシュを考える —

山本正昭¹⁾

Characteristics of castle in Fujian Province established by Ming Dynasty and its establishment background

Masaaki YAMAMOTO ¹⁾

1. はじめに

琉球列島のグスクには防御的性格を含み込むことは従来までの研究について、その立地面や平面プランの形態等から明らかにされてきており、その実態のみならず、他地域との比較の中で海外諸地域からの影響を受けているという指摘がなされている(註¹⁾)。この点においては石積み構造面で見るとグスクと中国大陆の城郭遺跡との関係性は希薄であることを過去に指摘したことがあるが(山本2019)、それでも平面プランから見ると、「馬面」や「雉」に類似する城壁からの張り出し施設や、門を複数ヶ所設置する出入口についても「甕城」に類似していることから中国大陆の城郭遺跡との関係性を有することは自明であり、このような命題においては検証し続けていく意義は大きいものと考え(註²⁾)。加えて、グスクにおける防御的性格を読み込む上で海外諸地域からの影響を検証していくことは築城技術の伝播という点に留まらず、戦いの実相における相違が抽出されるものと考えることができる。そこで本稿ではグスクの防御性についての成立を考えていく上で、琉球列島と地理的に近く、歴史的にも関係性が長く密な福建省を、そしてグスクが機能していた時期に近い明朝が設置した千戸所を防御するための城、所城における実像について取り上げていきたい。

2. 福建省内における所城

中国・安徽省鳳陽県出身の朱元璋、すなわち洪武帝によって1368年に建国された明朝は反明勢力である張士誠、方国珍の残党を一掃することを目的に

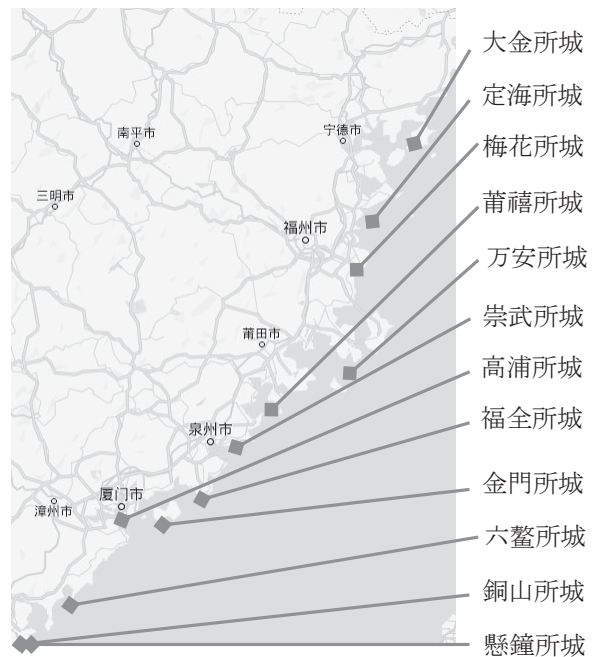


図1 福建省内の所城分布図

最初の実禁令を1371年に発布することになる。先の反明勢力は海岸部を主な活動拠点にして暴力的行為に及ぶ倭寇と合流して活動することによって、沿岸部は治安が悪化していく状況に陥った。とくに福建、浙江省の沿岸部において海賊的行為が頻発したこともあって、明朝による取り締まりの強化策として海禁令が敷かれ、更に強化していく方向へと進む(檀上2007)。

当初は中国沿岸部の治安維持を目的とした海禁令であったが、1381、1390、1397年と同令が立て続けに発布されるに合わせて、密貿易を禁じて公貿易

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

のみとする、貿易統制としての意味合いが強くなっていく。このような状況において貿易統制と沿岸部の治安維持としての機関「衛」や「千戸所」「巡検司」を各地に設置、そしてそれらを防御するための「衛城」や「所城」が1380年代後半以降に次々と築かれていく。

1386年の林賢事件をきっかけに日明間の国交は断絶することになり、翌1387年からは、明朝は中国東南の沿海部において海防施設の増設や新設が矢継ぎ早に実施していく。同時に、海防施設建設着手のために信国公湯和が江蘇、浙江方面、江夏侯周徳興が福建方面に派遣されることになる。^(註3)

これら1387年から実施される衛城、所城の築城を始めとする海防組織の充実、強化が行われていくと同時に、沿岸部住民の大陸部への強制移住や出海を沿海部住民に禁じるといった倭寇と沿岸部住民との関係を根絶していく政策を実施する。以上の政策が効を奏して洪武朝後半期、すなわち14世紀末には海上の混乱が沈静化することとなる。上記における一連の動向は明初における海防体制の確立として捉えることができる（檀上2004）。とりわけ浙江と福建方面においては倭寇による被害報告が14世紀後半には10件、『明実録』や『明史』で抜粋できることから（鄭2013）、明朝による海防強化策は、中国沿岸部における治安維持のためには、喫緊の課題であったことが容易に想像される。

中国沿岸部の治安維持として設置された「衛」と「千戸所」との関係については衛1ヶ所につき5カ所の千戸所を管轄しており、個々の千戸所には1140名の兵が配属されていた（蘇2014）。すなわち、1カ所の衛につき平均5700名の兵を統括していたことになる。浙江省内には千戸所が25ヶ所設置されていたことから142,500名、福建省内には千戸所が12ヶ所設置されていたことから68,400名もの兵が、両省内では配備されていたことになる（周2017）。衛が設置されている衛城並びに千戸所が設置されている所城は概ね、1387年前後に築城されたことについては地方誌に記されている。それは以降の清代まで中国沿岸部における防御施設として機能し続けていたことから、築城以降も数回に及ぶ補強や改修、増築といった防御維持と強化が断続的に行われることとなった。このように長らく、衛城や

所城が維持された大きな要因として、これらが倭寇対策における最前線となったことに因るのは言を俟たない^(註4)。今回触れる福建省内の所城を概観しても築城以降、ほぼ全ての所城において改修が行われている。

更に所城における特徴としては海岸部近くに所在しているが挙げられる、これは沿岸部の治安を維持するために円滑な軍事行動が可能な立地であると言える。また、倭寇鎮圧の拠点としての機能を所城は担っていると同時に、倭寇からの攻撃に曝されることも少なからずあったことから、行政機関や都市などの生活空間を防御する県城や府城と比べてこれら所城は軍事的性格がより全面的に現れた城であると言える（鄭2017）。加えて、現存している所城の出入口には、出入口前を城壁で囲い、二重の出入口とする「甕城」（写真1）を採用している事例が見られる^(註5)。但し、全ての出入口を甕城とする事例は福建省内の所城では皆無であり、単純な平入り状の出入口を主とする事例が多い。

次章においては福建省に所在する、大金、定海、梅花、万安、莆禧、福全、崇武の7ヶ所の所城について、その特徴を個別に触れていく。と同時に現在における残存状況についても、触れていく。

3. 各所城の現状

各項目については城名、①別名②所在地③規模（城牆周）④文化財指定の有無⑤立地⑥主な残存遺構⑦築城年の順で記していく。

（1）大金所城

①大京城堡②寧徳市霞浦県長春鎮大京村③2815m④第三批福建省文物保護単位⑤平地から低丘陵⑥城壁、城門、護城河、井戸⑦1387年

現在は大京城堡としての名称で一般的に表記されているが、かつては「大金千戸所」を含む城郭で、ここでは「大金所城」としての名称を用いる。当該所城は江夏侯である周徳興の指揮によって1387年に築かれたが、1410年には倭寇によって落とされている。その後、1417年に城壁を高く増築し、護城河を設置、城門を甕城形式として防御の拡充を行っている。万暦年間（1573～1620年）には修復が行われている。福建省内12カ所の千戸所で随



写真1 大金所城遠景（北西から）



写真4 大金所城 馬面



写真2 大金所城の護城河



写真5 大金所城 南城門 城内側



写真3 大金所城 南城門 城外側



写真6 大金所城 龜城

一とされ、面積においても最大となる（清华大学出版社2015b）。

現在の太京村でも古くからある街区が城内となり、その外縁部を城壁が囲繞している（写真1）。城壁は東端部で崩されている部分が見られるものの、ほぼ全周が残存している（図1）。城壁ラインは直線で構成されており、とくに南西から南東にかけての城壁は直線状に約850mにわたって延びている。そして、その城壁に沿って護城河が設置されている（写真2）。この南西から南東にかけての城壁は城門の両側250mにおいて上半分が撤去されており、残存高は3mほどとなっている（写真3）。

北側一帯を画する城壁は丘陵部の一部を取り込んでおり、南西側を画する城壁には張り出しが1ヵ所配置され（写真4）、城壁に沿って護城河が設置されている。出入口は南東、南、東側の3ヵ所見られ、何れも拱門形式が採用されている^{（註6）}ことに合わせて、城内側入道の両側に石積みで城壁から5m～10mほど張り出している（写真5）。これは寄せ手の頭上への攻撃を行うことを目的とした足場となる張り出しで、仮に城門が破られたとしても通路部分に柵や逆茂木等といった仮設の阻塞物を置いて進入を阻むと同時に、死角となる頭上への攻撃を加えることで城外へ撃退すると言った効果が想定される。

最後に東側の出入口は円弧状に外面が突出する甕城形式となっている点を挙げておきたい（写真6）。他の城門と比較して規模が大きい点や城壁の高さは約8mと他の箇所よりも高い点、城門内側の通路に沿う石積みが10m強、張り出している点からも、この城門はかなり強固な造りとなっていることが解る（写真7）。海岸線に最も近い城門であることから、海から侵入してくる倭寇に対しての防衛的な意識の高さが読み取ることができる。

他に城内外にて近年における修復箇所が複数地点で見ることができる。とりわけ城門周辺は全て修復が近年、行われているような状況で、南東側の出入口から南へ続く城壁の上部や東側の出入口周辺の城壁に設置されている女塙は原状通りに復元されているか否かは検討を要する（写真8）。

なお、城内は南西側を中心に宅地が占めており、その中央部に城隍廟が立地する（写真9）。対して

城内の東側は耕作地、荒蕪地となっているが標高約50mの低丘も見ることができる（写真10）。この低丘は城内で最も高い地点であることから物見として機能を有していたと思われる。また、明清代に開鑿されたと思われる井戸が城内に4ヶ所、残っている。

（2）定海所城

①—②福州市連江县筱埕镇定海村③約2700m
④連江県級文物保護単位⑤平地から低丘陵⑥城壁、城門、護城河⑦1387年

南側が海に開いた谷地全域が城郭の範囲となり、現在は谷の底部から斜面にかけて住居が密集している（写真11）。更に背後の丘陵のピークを取り込むといった広大な平面プランを呈している。かつて亭角と呼ばれていたこの地に明代初め頃、定海千戸所が設置されたことから、それを含みこむ形で城壁が築かれた所城である。この南限にある城壁から更に南へ約2000mの位置に現在の港を見ることができる。清代には琉球から福州へ入る進貢船の停泊地の一つとして利用されていたことが1830年代に成立した『渡閩航路図』（平川2019）に見ることができる。このことから良港を南側に備えた所城と言うことができる。当該所城は周徳興の指揮によって1387年に築かれたが、大金所城と共に1410年に倭寇によって落とされている。その後、1537年、1561年、1703年に3度の改修が行われており、とくに1561年の改修については1558年、倭寇の攻撃によって陥落した際に、南城門を改修して現在見られる形となった。この南城門は比較的良好に残存しており、凸状の矩形を呈する甕城となっている。2005年に修復されており、石積みの積み直し箇所がかなり見られる（写真12）。この南城門が城内では最も標高の低い場所に位置し、かつ港に最も近い城門である。現在の港附近は埋め立てが進められていることから、かつては現在よりも海岸線が近かったと思われる。南城門の城壁には「定海古城」の表示板がはめ込まれており、最も外側の門は東西方向に開き、拱門形式となる（写真13）。また、「會城重鎮」と印刻された扁額を眉石の上部に見ることができる。城門が破壊を受けたことを踏まえて、防衛力強化のために甕城形式を南城門に採用している。この城門を通過し左折した先には南北方向に開く、同規模の拱



写真7 大金所城 甕城 城内側



写真10 大金所城 遠景（北東から）



写真8 大金所城 女牆



写真11 定海所城 城内の現居住区



写真9 大金所城 城隍廟



写真12 定海所城 甕城 城外側



写真13 定海所城 拱門①



写真16 定海所城 城内道



写真14 定海所城 拱門②



写真17 定海所城 城隍廟



写真15 定海所城 甕城内に密集する住居



写真18 定海所城 城壁 城外側

門が2カ所連続して設置されている（写真14）。この甕城内部の空間には民家が密集しているため、南城門全体の面積は判然としない（写真15）。これらの門を通過すると幅の広い道が南北方向に走り（写真16）、その突き当りには「黄氏廟」が所在する。この一帯は平坦面となっているが、東西北側は勾配の強い傾斜面となり、雛壇状に家屋が立ち並んでいる。城隍廟は南城門から北へ約300mに位置する斜面の中腹に立地している（写真17）。

城壁は南城門から東西方向へ延びているのを確認することができるが、近年の修復、補強箇所が多く見られ、現状を保持している箇所は極めて少ない。それでも、東側並びに西側へ斜面に沿って延びていく、高さ約5～6mの城壁は完全にこの所城の弱点となる谷の開口部を塞ぐことを意図して設置しているのが、理解できる。残存している城壁の西端は丘陵を登り切る手前で、宅地と車道によって、東端は宅地によって崩されている。これらの城壁は東西方向に一直線状に延びており、約600mにわたって残存している（写真18）。とくに馬面などの張り出し施設は見らないが、上端幅は約5mとかなり厚みを有している（写真19）。この城壁の内面は一部宅地に取り込まれて崩されていることから、外面と比較して残存状況は良好ではない（写真20）。

北側は丘陵頂部・双髻峰を取り込む形で少し下った中腹の山林内に城壁が巡り、城門が1カ所、設置されていると云われているが、筆者の踏査では現地での確認ができなかった（註7）。

なお、琉球国への冊封使が帰国する行程を描いた『奉使琉球図巻』には当該所城を沖から遠望したと思われる風景が描かれている（註8）。それは奉使琉球図巻に所収されている「舟抵福州」にて、楼阁を伴う城門と、城門から背後の丘陵にかけて延びる城壁、そして物見と思われる張り出しが描写されている（写真21）。城門は南城門に見られるような甕城形式ではなく、平入り状となっている点や山中を縫うような隘路が城門手前まで取り付けられている点で南城門以外の城門であることが考えられる。また、丘陵背後へと女牆を備えた城壁を廻らせている点や隅角部に張り出しが描かれている点などは当該所城の防御性の高さを窺わせる。城壁内には軒を連ねた建物群が描かれている点のみは現状での共通点として

見出すことができる。このように18世紀における定海所城の概要を捉える上で『奉使琉球図巻』「舟抵福州」は極めて重要な資料であると言える。

（3）梅花所城

①—②福州市長楽市梅花鎮③—④長楽市級文物保护单位⑤丘陵⑥城壁、城門、井戸⑦1387年

梅花は福州から国内沿岸部へ出入りする物資の集積地として、そして海商が取引を行う場として明清代には賑わった。琉球からも多くの人々が往来した場所の一つに挙げられ、15世紀初めに琉球から訪れ、織物技術を当該地に伝えた蔡夫人を祀る廟が梅花所城の城外すぐ近くに所在している（写真22）。

当該所城は海岸に面した標高20m前後の丘陵一帯に占地しており、北側には閩江の河口を広く望むことができる。周徳興の指揮によって1387年に築かれた所城である（鄭2017）と共に「長楽倉」と呼ばれる倉庫群も城内に建てられた。15～17世紀においては改修、増築したという記録は見られないが、1719年、1733年、1745年、1762年と18世紀には4度に及ぶ改修が行われている。

現在は西城門と北側を画する城壁の一部、そして明代まで遡るとされる井戸が残っているが、大部分が近代の宅地化によって失われている。かつては約2100mに及ぶ城壁が集落を圍繞していたとされており、東側と南側にそれぞれ城門が設置され、敵楼は城壁上に24カ所、設置されていた（註9）。

西城門は内外ともに宅地が密集しており、平入り状の拱門となっている（写真23）。城門は城内側の通路に沿って5mほど城壁から張り出しており、寄せ手に対する頭上への攻撃を意図した形態となっている（写真24）。城外側の拱門上には獅子と草花の文様が刻まれた石彫物がはめ込まれている（写真25）。この西城門から南北に延びる城壁は高さ約6mで、丁寧に加工された石材で積み上げられている。城壁上は宅地となっていることから、現在の城壁が旧来の城壁の高さであるかの判別はつかない（写真26）。このような城壁は梅花鎮の北側の崖面に沿って高さ3～4mほど残存している場所が見られるが、ここも城壁上は宅地が密集しているため、旧状を窺うことは困難である（写真27）。

これら以外に梅花所城には明代まで遡るとされる



写真19 定海所城 城壁上



写真22 梅花所城内に所在する蔡仙廟



写真20 定海所城 城壁上から見た内面



写真23 梅花所城 西城門 城外側



写真21 『奉仕琉球図』『船抵福州』に描かれた定海所城（沖縄県立博物館・美術館蔵）



写真24 梅花所城 西城門 城内側



写真25 梅花所城 西城門上の石彫



写真28 梅花所城 井戸

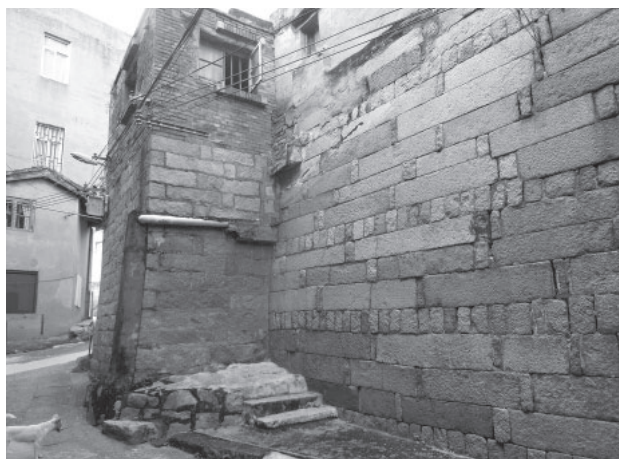


写真26 梅花所城 西城門周辺の城壁



写真29 梅花所城内 顕彰碑



写真27 梅花所城 北側城壁



写真30 万安所城 北側城壁全景

井戸が西城門城外側近くと西城門城内側の2カ所、確認することができる（写真28）。また、梅花千戸所が万暦年間に設置した、陳氏と胡氏の功績を讃える石碑（写真28）や、倭寇から梅花鎮を守ったとされる同千戸所軍士、林位の遺徳を祀った「林位宮」が西城門から城内側、東へ約100m離れた位置に所在している。

（4）万安所城

①—②福清市东瀚镇万安村③約1730m④福清県級文物保護単位⑤沿岸部⑥城壁、井戸⑦1387年

万安所城は1387年に万安に千戸所が設置されたのに伴い、明朝よって江夏侯周徳興の指揮により、泉州、興化、福州、漳州から夫役を集めて、約10年かけて築かせている^{（註10）}。万安は龍高半島の突端部に位置しており、東南北は海に面している。かつて、万安村を圍繞していた城壁はその大半が撤去されてしまっており、現在は北側の一部、東西方向に250mほどが残存している（写真30）。但し、徳如園城牆公園として、周辺が公園整備されたのに伴って、城壁も大部分が積み直されている。現在見ることのできる城壁は幅約3m、高さ約3～5mで、外面は海岸部に面している（写真31）。また、城壁上は遊歩道として整備されており（写真32）、内面は公園の北側を画している（写真33）。

この城壁が見られる徳如園城牆公園から北東側には小さな湾があり、漁港として現在も使われている（写真34）。この万安には明朝が直轄していた港があり、鄭和が第7次の遠征時において、この万安港に寄港し船を整備している。当時の様子が窺えるものは全く見られないが、このような良港を押さえる意味でも千戸所をこの地に置いたことや城内に港を取り込んだことは容易に想像できる。また、当該港へ入港する際の標識として機能した高さ18mの石塔・万安祝聖塔^{（註11）}が港の南側に隣接している丘陵頂部に見ることができる（写真35）。

かつての城内には五目井と呼ばれる明代の井戸（写真36）や、練兵場跡とされる石材で舗装された広場（写真37）が残されている。何れも万安所城内でも西端に相当する場所で、恐らく西側を画していた城壁の近くであったと考えることができる。そして、城外ではあるが、西側に広がる丘陵の頂上部

（写真38）には高さ5m、一辺が12mの規模を有する烽火台がほぼ完全な形で残っている。明朝は16世紀、海防を目的とした烽火による伝達ネットワークを確立させたが、この烽火台は現在、その一端を知る貴重な遺構であると言える（写真39）。

以上のように万安所城は現状において城壁は殆ど撤去されていることにより、かつての平面プランを窺い知ることはできないが、千戸所が設置されていた時期の旧跡をいくつか窺うことができる。

（5）莆禧所城

①—②莆田市北岸管委会忠门镇莆禧村③1,900m④福建省文物保護単位⑤丘陵⑥城壁、城門、井戸

莆禧所城は1387年に明朝よって江夏侯周徳興の指揮により忠門半島の南端に築かれた城である。他の所城と比べて城周が2000m以下と小規模な部類に入る。現在は宅地が密集しているが、かつて城内には千戸所や倉庫が建てられていた。

1562年には当該城が倭寇による50日にも及ぶ攻撃に曝されたものの、落城は免れたことから防御性の高さがうかがわれる。南側は海に面しており、城壁は高低差を活かして丘陵上に配置している。内陸に面した北東側は平地となり、水路が東西方向に流れていることから護城河として機能していたと考えられる。

かつては東西南北に各1カ所、計4ヶ所の城門が設けられ、3カ所の砲台を設置する角台と6ヶ所の排水用の暗渠が存在していた。しかし、1939年に東側と南東側の城壁が、撤去されたことにより、大きく変容してしまった。更に近年の公園整備によって石積みの積み直しや園地化が進められ、更に南側沿岸部は埋め立てられたことから周辺も含めて、かなり旧状が失われてしまっている。

現在は北西南辺の城壁を1335mにわたって見ることができる。とくに南側の城壁ならびに甕城形式となる南城門は近年の積み直しが未だ行われていないことから、旧状を残している貴重な場所である。また、かつて海岸に隣接していたことから、倭寇に対する防御性が最も現れ出た箇所、丘陵斜面を登り切った位置に4m前後の城壁を配置するといった、自然地形を利用して防御性を高めていることが読み取れる（写真40）。



写真31 万安所城 北側城壁外面



写真34 現万安漁港（奥が城壁）



写真32 万安所城 北側城壁上部



写真35 万安祝聖塔



写真33 万安所城 北側城壁内面



写真36 万安所城 五目井



写真37 万安所城内 練兵場跡



写真40 莆禧所城 南側城壁



写真38 万安所城西側丘陵



写真41 莆禧所城 南城門①



写真39 烽火台の遺構



写真42 莆禧所城 南城門②



写真43 莆禧所城 西側城壁



写真46 莆禧所城 北城門②



写真44 莆禧所城 北西側城壁と馬面



写真47 莆禧所城 北城門③



写真45 莆禧所城 北城門①



写真48 莆禧所城 北西角台

南城門は城門前を円弧状の城壁を廻らせた甕城で、外側の門は横長の天井石1枚を載せた形式の門である（写真41）。一方で内側の門は拱門となっている（写真42）。この周辺の城壁は高さ4mで城壁上端は厚さ約2mで、城門から東へ100mの地点からは宅地化により崩されており、全く痕跡が見られない。城門から西側にかけては、崩されている部分も見られるが、城壁ラインは窺われる程度に残存している。西側においては高さ約5mの城壁を見ることができる（写真43）が北西部から北側の城壁は近年の積み直しが顕著に見られる。北西部の端に張り出しが見られるのと同時にその城壁外側は公園化が進められている（写真44）。北辺の城壁には甕城形式の北城門が取り付けられている。南城門と同様に城門前には円弧状の城壁を廻らせているが（写真45）、規模としては当該城門が面積的には2倍近く有している。外側の城門は横長の天井石1枚を載せた形式の門で（写真46）、内側は拱門で城内側入道の両側に石積みが城壁から6mほど張り出している（写真47）。この北城門は近年の修復が顕著に見られるが、修復前の写真を見る限り現状に近いものと思われる（中国建筑工业出版社2015）。北西隅には高さ約6mの張り出しを見ることができる（写真48）。これは砲台並びに見張り台としても機能した角台である。この張り出し並びにその周辺の城壁も近年の修復が顕著に見られると共に、城壁外側は公園化が進められている（写真49）。

城内においては北城門近くに明代まで遡るとされている井戸と城隍廟を見ることができる（写真50）。

（6）福全所城

①葫芦城②晋江市金井鎮福全村、溜江村③2,145m④福建省文物保護單位⑤平地⑥城壁、城門、井戸

1387年、海湾海峡に面し、金門島を近くに臨む金井鎮の東南部沿岸近くの福全に千戸所が設置されたのに伴い、明朝よって江夏侯周徳興が指揮して、福全所城は築城された。平面形が瓢箪に似ていることから別名「葫芦城」とも呼ばれる。築城後の1417年には城壁をより高くするための増築を行い、東西南の城門を甕城形式に増強、1443年には門楼を建造し、1677年には修復が行われている。その

後、日中戦争時には城壁が一部、撤去され、1958年の8.23砲撃時にも被弾するといったように、破壊の憂き目に遭う。近年において北城門から西城門ならびにそれらを結ぶ城壁の大部分が修復されている（写真51）。

かつて、東西南北に各1ヵ所、計4ヶ所の城門が設けられており、2145mに及ぶ城壁が現在の福全村と溜江村を圍繞していた。福全村内部の街路はT字状となっている部分が多くあり、これらを連結している箇所を見ることができることから「丁字街」と呼ばれている（阮2018）。街区を複雑にすることで、侵入者を混乱させるといった防御性が窺われる。

北城門は甕城形式となっており、城門前に円弧状の城壁が取り付く（写真52）。近年の修復整備により城門上には門楼が建てられている（写真53）。西城門は「迎恩門」と刻まれた石板が掲げられた、平入り状の城門となっており、こちらも近年になって城門上に門楼が建てられている（写真54）。また整備された城門は全て拱門として復元されている。この城門相互を結ぶ、近年整備された城壁は高さ約6mであるが、旧状については不明である。また、北西隅には角台と思われる張り出しが1ヵ所見ることができる（写真55）。

旧状を保持しているのは北東部から東にかけてと南西から南にかけての城壁である。城壁面石の大部分が失われており、城壁内部の土が露頭している。最も高いところで約3.5m、残存しており（写真56）、北東隅と南西部分には面石ならびに根石が原位置を留めているのが確認できる（写真57）。これらの城壁は清代に改修を受けているとされている（阮2018）。

また、東側には城壁が削られ切通しとなっており、断面が観察できる箇所が見られた。細かい砂粒を吐き固めているが、版築工法は採られていないことが確認できた（写真58）。東城門から南城門を結んでいたとされる城壁は宅地化により完全に失われている。

東城門に比定される部分は宅地化も進み、城壁などの痕跡を留めていないが、鍵の手状にクランクする旧道が見られることから、かつて甕城形式の城門であったことが推察される。南城門については大きく改変を受けており、その詳細を窺うことはできな



写真49 莆禧所城 城壁外の園路



写真52 福全所城 北城門



写真50 莆禧所城 城隍廟



写真53 福全所城 北城門の門楼



写真51 福全所城 整備完了後の城壁



写真54 福全所城 西城門（迎恩門）



写真55 福全所城 北西角台



写真58 福全所城 東側城壁切通し断面



写真56 福全所城 西側城壁



写真59 福全所城



写真57 福全所城 石積み根石付近



写真60 福全所城 城内景観

い。この南城門の近くに城隍廟^(註12)が立地する(写真59)。

当該所城は微高地に築かれており、城内においては平坦面となる(写真60)。城外南側は4 mほどの高低差のある急斜面となっており、東側は緩やかに下り、約300mで沿岸部となる。

(7) 崇武所城

①—②泉州市惠安县崇武鎮③2,567m④全国重点文物保护单位⑤平地⑥城壁、城門、井戸⑦1387年

惠安县の東南部の泉州湾と湄州湾に挟まれた崇武半島の南側に位置する丘陵部に千戸所が1387年に設置された。それに伴って明朝により、江夏侯周徳興が指揮して、崇武所城は築かれた。その後の1417年には城壁をより高くするための増築を行い、東西城門を甕城形式に改修を行っている。更に嘉靖年間(1522～66年)、城門4ヶ所に門楼を新設し、1575年には城壁の南北西の3面に「虚台」と呼ばれる、銃孔を備えた高樓を4ヶ所、新たに設置している。1661年には鄭成功が当該所城を根拠地としたことから、清軍によって攻城された。その際に建物被害を受けたため、その後の1680年には修復がなされている。また1841年にも再度、修復が行われた。このように複数回にわたって増築や修復が行われた背景には倭寇の襲来が頻繁に起っていることと関係している。当該所城は1424年に倭寇によって攻められて落城は免れたものの、1558年には6昼夜に及ぶ倭寇の攻城によって陥落している。続く1560年においても落城し、60日間も倭寇によって占拠されるという憂き目に遭っている。このように福建沿海部が倭寇による被害が多発したことから、1567年に明朝は倭寇対策で戦果を挙げていた軍士である戚繼光を福建へ派遣して城の修復と練兵、軍制の整備などを実施し、防衛の強化を図っていくこととなる。

清朝末期以降、当該城は日中戦争時、1938年に艦砲を受ける等によって、荒廃の一途をたどっていったが、1988年に全国重点文物保护单位として指定を受けてからは逐次、城壁の修復が進められている。

現在、集落を圍繞する城壁と東西南北に各1箇所、計4か所の城門を見ることができる。東西北の城門

は外側に円弧上の城壁が附属する甕城形式となっており(写真61)、南城門のみは平入り状となっている(写真62)。北城門の眉石上には威繼光筆とされている「威鎮海邦」との文字が印刻されている。城壁の高さは最も高いところで約9 mあるが、天端部分は全て近年の復元が行われていることから、本来の高さは不明である。また、城壁上は女牆となっているがこれも近年の復元によるものである(写真63)。馬面とみられる張り出しは東西南北面に各1箇所、計4箇所見ることができる(写真64,65)。全体的に扇状の平面プランとなっており、南側には丘陵を一部城内に取り込み、北側へ向かって緩斜面となる。

今も全周約2.5kmに及ぶ城壁を見ることができるが、南側の城壁は新たに積み直しが近年行われており(写真66)、城壁全体が旧状を留めていると言いがたい。一方で城内も清代まで遡る古い街区が残存していることから、古鎮としての観光名所となっている。城壁外の南側一体、海岸側には彫刻公園が新たに設置されるなど周辺の観光開発が著しい^(註13)。

4. 福建省の所城に見られる特徴

今回、触れてきた福建省内の所城についてはそれぞれにおいて共通点と相違点を見ることができたので、以下に列挙していく。

まずはこれら所城に見られる共通点として、その立地に関して、海岸部を積極的に取り込もうとする事例は万安所城以外には見ることができない点が挙げられる。大金所城や福全所城は海岸から約500 m離れた平地に立地し、定海所城は海岸線より300 mほど奥に入った谷の最下部に城壁と城門を設置している。莆禧所城と崇武所城、梅花所城は海岸線が近くまで迫っているが、海岸に面した丘陵上に城壁を配置していることから、あまり水際を取り込もうとする意図見られない。それよりも海岸縁の断崖もしくは急斜面を利用して、防御性を向上させる意図が垣間見える。よってこれらの所城は海岸部を積極的に取り込むような形態はあまり確認できないと言える。

そして、今回触れてきた所城全てにおいて平面形が不定形であることも指摘できる。これは一部、丘陵を城内に取り込んでいることや、海岸線に面して



写真61 崇武所城 東城門



写真64 崇武所城 馬面①



写真62 崇武所城 南城門



写真65 崇武所城 馬面②



写真63 崇武所城 女牆



写真66 崇武所城 積み直しが行われた城壁

いる丘陵ではそのピークや尾根にあわせて城壁を配置していることから、自然地形に制約されることがその要因として挙げることができる。また、定海所城のように谷部の両側にある尾根線上に合わせて城壁を配置するといったような事例も見られることから、立地におけるバリエーションは多様であると言えることができる。この点については地形を活かしての防御性を優先させたが故に、全体的な平面プランにおいては歪な形にならざるを得なかったと評価することができる。

子細な点での共通点として、馬面については連続させて配置する事例は皆無であり、最多でも崇武所城の4カ所といったようにその数は決して多いとは言えない点が挙げられる。馬面は城壁に取り付く攻め手に対して脇腹を攻撃するといった機能が考えられるものの、今回対象とした所城においてはあまり積極的にその機能を見出すことはできない^(註14)。むしろ、その上面の広いスペースを活用して戦闘指揮を行う空間として機能させたと考えた方が妥当と思われる。実際に『倭寇図巻』^(註15)においてはそれを示唆させる様子が描かれていることから、城壁上に展開させる守備兵を統括する士卒の陣地として所城では馬面が機能していたものと思われる。なお、所城と同時期に築かれた城郭都市では中国大陸内陸部において馬面を多用している事例が見られることから、沿海部と内陸部での城郭の有り方が異なることが指摘される^(註16)。

最後にそれぞれの所城における相違点としては、まず規模が異なる点を挙げておきたい。城壁周が最長である所城は大金所城で2830mであり、最短の所城は万安所城の約1730mとなっている。万安所城は大金所城の3分の2以下の規模であることから、その面積において画一性はあまり見られないと言えることができる。ただし、先の共通点で触れたように、立地におけるバリエーションは多様であることから、地形的な制約によって城壁を迂回させる必要が生じてしまうことや、地形的に防御に適さない場所はあえて取り込まないといった事情を察することができ、このことから所城相互に見る面積の差が生じていることを指摘できる。本稿で対象とした所城の中で城壁周が最短となる万安所城は三方が海岸線となる岬の先端に立地していることから、必然的に

地形的制約が強くなる。よって、地形を無視した人為的な平面プランを実現するよりも、地形を最大限に活かした平面プランへと、プランニングの読み替えが行われてたものと見て取ることができる^(註17)。

また、出入口の形態としては甕城と平入り状の出入口の両方を等しく採用している崇武所城、大金所城、福全所城や甕城の出入口が比較的多く採用されている定海所城、莆禧所城、平入りの出入口のみが確認される梅花所城といったように、出入口の形態は必ずしも一様ではないことが解る。所城の中でも甕城の形態を採用している出入口と採用していない出入口との共通性を見出すことはできなかったが、何らかの理由が存在するものと思われる。加えて、多くの所城は15世紀以降も機能し続けることから、後世に甕城として増築されたことも十分に考えられる。また、出入口は攻防の要点になることから、実戦を通して強化される部分とされない部分でその形態差が生じたとも考えることができる。

以上において、福建省内における所城の特徴を共通点と相違点でまとめてみたが、これらの特徴は今後、福建省以外の地域に分布する所城を見ていく上での基本的な観察ポイントとしてここに提起するものである。

5. まとめ

1387年前後という短期間において、明朝支配地域の沿岸部で衛城や所城といった新たな城が次々に築かれていった。「洪武期の築城ラッシュ」と言っても過言ではない状況が発生したその背景には倭寇をはじめとする反明勢力に対して楔を打ち込むためであった。新たな城が中国沿岸部に築かれたことによって、その築城技術はどのように深化したのか、そして他地域や明朝以外への階層、すなわち民間へ伝播していったのか、といった多くの疑問が新たに生じてくる。少なくとも言えることは16世紀に入ってから福建省の北部では民間の城が新たに築かれていくが、衛城や所城に見られる形態とはまた異なる形態を採用している。この点についてはまた別稿に譲ることにするが、争いの規模やその築城主体によって大きくその形態が異なってくることは、琉球列島でも日本本土の城においても大きく変わらない様態であると言える。

従来まであまり注目されることが少なかった14世紀後半の所城は新興の大国である明朝が築いた城の一形態としてではなく、今後における東アジアの城郭を考えていく上で重要な要素を内包していると認識されるべき遺跡であることを信じて止まない。

【註釈】

- (註1) 古くは上間清がグスクに見られる拱門の建築技術について、中国からの影響を受けているという指摘を行っている。上間は北宋朝に歴仕した李明仲が建築基準書として1103年にまとめた『營造方式』の知識を有した閩人が来琉し、その技術を伝えたことを想定し、沖縄県内に見られる拱門の技術系譜について検証を行っている（上間1977）。
- (註2) 2013年10月25日に沖縄県立博物館・美術館で行われた公開座談会『グスクから見た琉球の土木技術』では眞嗣一が多面的にグスクを見ていく上で、朝鮮半島並びに中国大陆の城郭とグスクと比較する重要性を説いている（沖縄しまたて協会2016）。
- (註3) 明朝は1386年の林賢事件を契機に同年、日本との国交を断絶する。このことは日本による倭寇取締りが期待できず、日本からの倭寇対策のために海防強化を図っていくことになる（檀上2007）。この様な状況下において中国沿岸部における新たな海防建設、すなわち衛城、所城等の築城へと展開していく。
- (註4) 崇武所城のように、17世紀に鄭成功が清朝に対抗するための拠点として利用された事例も見ることができる。
- (註5) 所城は清代にかけて修築されている事例が多く見られることから、現在見られる防御施設は全て築城時に構築されたものとは限らない。
- (註6) 東側の出入り口に見られる最も外側の城門は天井部に一枚岩を渡している形態となっている。
- (註7) 2010年12月に福建省の福州新聞にて定海所城に見られる山中の城壁が良好に残存しており、高さ3mの石積み城壁が120mにわたって見られるという記事がまとめられている。
- (註8) 『奉使琉球図巻』についての明確な成立年代は不明であるが、概ね18世紀頃とされている（沖縄県立博物館・美術館2008）。
- (註9) 道光年間に編纂された『長楽梅花志』による。
- (註10) 乾隆年間編纂の『福清県誌』による。
- (註11) 1599年に建造された花崗岩製の石塔である。現在はその麓にある祝聖寺が管理しており、福建省級文物保护单位に指定されている。
- (註12) この城隍廟は1983年に改修されて、現在見られる姿となった（阮2018）。
- (註13) 観光地化による景観の改変は行われているものの、海岸部の埋め立てなどは行われていないことから当該所城における立地上の防御性は現在も視認することができる。
- (註14) 管見限りでは城壁の隅角部が張り出す角台が確認できたのは莆禧所城のみであった。所城は不定形であることから隅角部を創り出すこと自体、稀である。
- (註15) 倭寇図巻は現在、東京大学史料編纂所が所蔵している16世紀における倭寇の様子を描いた絵画資料であり、17世紀前半に成立したと考えられている（東京大学史料編纂所編2014）。
- (註16) 中国大陆の同時期における城郭都市とされる山西省の平遥城や陝西省の西安城では馬面を連続的に配置している。前者は98カ所、後者は72カ所が確認されている（愛宕1991）。
- (註17) 明代における城郭都市で大規模な部類に入る西安城の城壁周は11.9kmにも及ぶことから、所城はその五分之一ほどの規模に相当する（愛宕1991）。

【参考文献】

- 上間清1977「ARCH—その系譜と沖縄の石造拱—」『琉球大学理工学部紀要 工学編』第14号 琉球大学工学部
- 愛宕元1991『中国の城郭都市』中央公論社
- 霞浦県地方志編纂委員会編1999『霞浦県志』方志出版社
- 檀上寛2004「明代海禁概念の成立とその背景」『東洋史研究』第63巻第3号 東洋史研究会
- 連江県博物館2006『連江県文物志』
- 檀上寛2007「『国初寸板不許下海』考」『明代中国の歴史的位相 山根幸夫教授追討記念論叢』汲古

書院

沖縄県立博物館・美術館2008『中国・北京故宮博物院秘蔵「甦る琉球王国の輝き」』

鄭樸生2013『明代の倭寇』汲古書院

蘇勇軍2014『明代浙東海防研究』浙江大学出版社

東京大学史料編纂所編2014『描かれた倭寇「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』吉川弘文館

清华大学出版社2015a『浙江古建筑地図』

清华大学出版社2015b『福建古建筑地図』

沖縄しまて協会編2016「公開座談会 グスクから見た琉球の土木技術」『琉球の築土構木』

周旻（編）2017『籌海図編』中华书局

鄭建豪2017「梅花古城建造年份小议」『文化梅花』长乐市梅花民间文化艺术促进会

鄭欣2017「明初福建城池建設及其特点与成因」『閩江学院学報』No.3 閩江学院

阮儀三2018『遺珠拾粹 中国古城古鎮古村踏察一』

東方出版中心

平川信幸2019「渡閩航路図 一卷」『琉球船と首里・那覇を描いた絵画資料研究』琉球船と首里・那覇を描いた絵画資料研究会

山本正昭2019「グスクの石積み遺構に係る若干の考察一周辺地域との関係性を射程に入れて一」『沖縄県立博物館・美術館紀要』第12号 同館

中国建筑工业出版社2015『明代沿海抗倭城堡 中国精致建筑100』

本稿を草するにあたって、そして多くの方々にご助言を賜った。末文ではあるが以下にご芳名を記して感謝の意とする。（敬称略）

森達也（沖縄県立芸術大学）、上里隆史（浦添市立図書館）、平川信幸（沖縄県教育庁文化財課）、山元貴継（中部大学）向井一雄（古代山城研究会）、臼杵勲（札幌学院大学）、石井龍太（城西大学）

